D 90　女子大学生の着衣推移実態に関する研究（第２報）

神戸大教育　稲垣和子　○楠木雅子

目的　健康で快適な衣服を追求し、着衣調査を進め、それらの実態の変遷をたどって、実情を把握して、それを被服教育と研究に役立たせるべく、調査を実施した。約20年前（1968～1969年）の女子大学生の着衣調査と、今回（1986～1987年）の着衣調査との比較を行い、日本家政学会第39回大会に於て発表した第１報に引続き、若干の成績を得たので報告する。

方法　調査は京阪神に居住する健康な女子大学生（18～19才）を対象とし、1968～1969年 121名、1986～1987年 125名について、毎月中旬に調査用紙を配布し、記入せしめた。調査内容の大要は、1）年齢、身長、体重　2）気温、湿度、暖房冷房の有無、寒暑感覚等　3）衣服重量、衿開き、袖丈、衣服丈、材質、デザイン等　4）靴下手袋等、類被服の重量、材質、デザイン　5）靴類、傘類の重量、である。以上の項目における調査結果を集計し、比較検討を行った。

結果　1)単位体表面積（1 ㎡）当たりの衣服重量は11,3,5月度を除き、先年対比0.81～0.96と減少傾向を示す。部位別衣服重量は、肩重量では 6～10月は先年対比0.80～0.97と減少傾向を示し、11～ 5月は先年対比1.03～1.56と増加傾向を示す。腰重量では先年対比0.63～0.93と年間を通じ減少傾向を示す。2)衣服着用総枚数は 1,3,5月度を除き、先年に比し 0.2～0.8枚減である。部位別衣服着用枚数は先年に比し、上半身では 0.5～1.0枚減下半身では 0.2～0.8枚増、腹腰部では 0.5～1.4枚減である。3)寒暑感覚は先年に比し、今回の調査結果では耐寒、耐暑が劣っている。これらについて更に検討し、報告する。